



楽しみながら地域の資源を発掘！

しむかっふふるさとふつつくふくらむ協議会（ふふふ協議会）

大きな森に囲まれた自然豊かな村。  
地域の笑顔が集まる場、「ぼっこてぶくろ」。  
おしゃれでかっこいい村の暮らしがここにある。

森林が94%を占める占冠村。  
人口は1200人ほどの小さな  
この村には、大きな森と川、そし  
て道内でも屈指の変化に富む溪  
谷がある。  
道の駅自然体感しむかっふか  
らほど近い「赤岩青巖峡」には、  
赤や青の巨大な岩が屹立し、全国  
のロッククライマーの垂涎の的  
になっている。  
深く大きな森は、きれいな空気  
植物や野生動物の多様な生態系

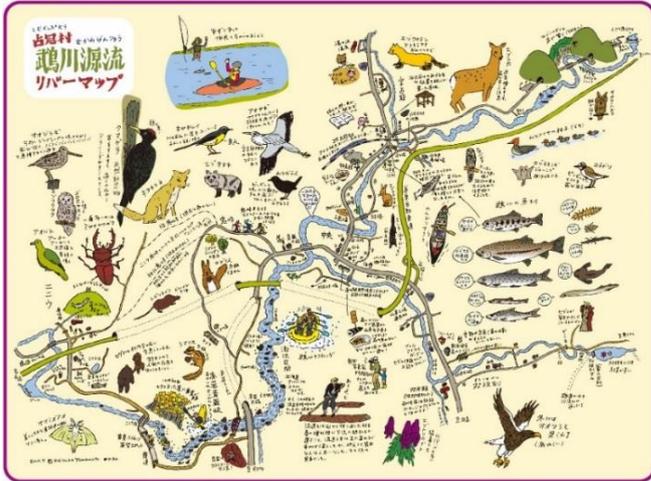
森の中の小さな村



を維持し、水や食べ物やエネルギー  
ーなど、人間が生きていく上で最  
も大切なものを与えてくれる。産  
業革命以降、過度な成長を続けて  
きた人間社会によって地球は悲  
鳴をあげている。これからは深刻  
な水不足や食糧不足が世界中で  
起こってくると言われているが、  
そういう視点で占冠を見ってみる  
と、なんと豊かな世界が広がって  
いることだろうか。

「風の人」と「土の人」の融合

「しむかっふ」の語源は、アイ  
ヌ語の「シモカブ（とても静かで  
平和な上流の場所）」だ。  
目指すのは、村民が村の環境の  
素晴らしさを意識して暮らして  
いくこと。そんな思いで、平成20  
年、農水省の地域づくり事業を活  
用し、「しむかっふふるさとふつ  
つくふくらむ協議会（通称 ふふ



ふ協議会)」を設立。特徴は、「風の人」の新たな視点で地域の魅力を発掘すること。「風の人」とは、移住者など外からの視点を持つ人のことで、ここでは、自然ガイドやロッククライマー、料理人、クラフトマン、メイプルシロップの作り手などを指す。

一方、昔からこの地に暮らしている人々は「土の人」。「土の人」は、「風の人」が知らない暮らしの知恵や、長い時間をかけて得た経験を持っている。

### 「風の人」の視点と「土の人」の知恵。この2つが融合することで、たくさんの地域の魅力的な資源、すなわち地域の未来につながる「宝」を発掘することができる。

**鷓川リバーマップを通じた流域交流**

森から流れ出す小さな源流がいくつも集まって、村の中央を流れる一級河川「鷓川」になる。

ふふふ協議会では、この村のシンボルとも言える鷓川の源流リバーマップを制作している。鷓川流域に生息する動物やさまざまな地域資源をユニークな解説とともに描いており、見る人を引きつける。

このリバーマップの完全版「鷓川135キロメートルひよる長マップ」は、B5サイズを縦に4枚つないだユニークな形で、河川、道路、建物は実際の配置を基に縮小して収めているので、実際に持ち歩いて利用できる実用性も併せ持ち、半分から下部は、同じ鷓川流域のむかわ町が描かれている。これは、行政の区域を越えて、「鷓川の未来について一緒に考えていこう」という意味が込められている。

**販売やPRを目的としないイベント「山菜市」**

例年5月の最終日曜日には道の駅で「しむかつぶ村民 山菜市」が開催されている。村の資源である山菜をみんなでもっと楽しみたいという有志が平成18年から企画し、すでに12回を数える。

道内随一の激流といわれている鷓川は、日帰りラフティングツアーも有名だが、源流から河口まで、マウンテンバイク、ラフティング、カヌーを使って6日間かけて下るツアーや、川に足を浸してワインを楽しむ会、小学生向けの川遊び遠足など、川に親しむための催しが数多く開催されている。

この山菜市の面白いところは、村の特産品である山菜や鹿肉のPRや販売を、イベントの「目的」と考えていないところだ。

開催前日の2日間は「山菜採りワークショップ」を行っている。実はこれこそが、狙っていた「真の目的」である。ワークショップでは、各地から集まった参加者が、地元のガイドと一緒に山や河原に入り、さまざまな山菜を採取していく。その過程で「山菜の種類」や「見分け方」「持続可能なとり方」「注意すべき毒草」など様々な



「山菜市」は全道のボランティアで運営される

「山菜採り文化」のノウハウを学び、夜の交流会では山菜料理を通じて、地域の人と交流している。平成28年5月29日、今年も道の駅しむかっぶの山菜市会場は多くの人で賑わった。スタッフには村の人たちのほか、各地から集まったワークショップの参加者も加わっている。

驚くべきことに、この催しには役場や観光協会の仕切りはなく、全てがボランティアで運営されている。わざわざ休暇を取って自立的に運営に参加する人が多く、それぞれができる範囲で楽しみながら参加している。山菜の食文化を学びながらの準備や、地域との交流、さらにはイベントを開催する達成感が魅力となり、毎年の行事として続いているのだろう。山本代表はこう言っている。「いまでは、村の催事として定着しているが、開催当初は地元の人だけが参加する小さな企画だった。最初から、暮らしの中に山菜の文化を復活させることが目的で、来場者や売上げを増やすことは考えていなかった。販売するのも交流の一部と考えており、他の地域の人達にも村の魅力を感じてもらいたい」。有志たちの楽しもうという気

持ちが、村を訪れた人たちに伝わり、参加者との交流が深まることでこの催しが大きく育ってきたのだろう。

### 村民が気軽に集まれる場づくり

「村民が気軽に集まれるコミュニティ・カフェを作りたい」地域づくりメンバーの数名が動き出した。そしてついに、平成24年、村の空き家を借りて、村民が集まれるコミュニティ機能を持った手作りカフェが誕生した。その名も、「ぼっこてぶくろ」。どこかノスタルジックな名だ。店舗の内装は活動に賛同した隣町の大工さんが「地域のためになるならぜひ協力したい」と古材を使って、ボランティアで作業してくれた。15人ほどが入れる、こぢんまりとした味のある仕上がりになっていて、懐かしさとともに温もり

が感じられる。

当初は、土日のカフェ営業とエゾシカなど地域の食材を持ち寄って交流する「コミュニティキッチン」から始め、徐々に「歌声喫茶」や「読み聞かせ」など多様な利用を増やしてきた。

現在は平日の昼は「村民食堂」としてランチ営業もしている。

ブログやSNSを活用し、人目を引くインパクトとセンスの良さにこだわり、「行ってみたいな」と思わせるような情報発信を心がけている。すると徐々に「ぼっこてぶくろ」や「村民食堂」に訪れる人は増え始め、今では、ロコ



地域カフェぼっこてぶくろ

ミで評判を呼び、地域内外から多くの人が集まり、会話と食事を楽しむ交流の場となっている。

楽しくないと人は集まらない。無理をすると疲れて長続きしない。「自発的にできることをしただけだよ」と笑って話していた山本代表の笑顔が印象的だ。



### 100年後も「今のままで」

占冠村には、都会のような便利なものは何もないが、都市部では難しい住民が主体的に地域の課

題に取り組む機運がある。

住民が意見を出し合って一緒に考えていかなければ地域は良くなる。課題を行政に丸投げするのではなく、自分たちで考えて色々調整し、その上で行政にも協力してもらい、よし、皆でやってみよう！という行動がなければ、誰かに負担が重くのし掛かることになる。

「持続可能な社会の構築」という言葉を最近ではよく耳にするが、100年後という時間軸を見据えた時に、どのような村になっていけば「持続可能」といえる

のだろうか。山本氏は、『今のままであり続けること』だと言う。私たちは経済と引き換えに森林や食料を代表とするさまざまな地域の資源を、「消費」するべきではない。かつてアイヌの人たちがそ

うして暮らしてきたように、自然に感謝しながら再現可能な分だけ进行いただくことで、自然が守られ、持続可能な地域となるのだ。

もちろん、仕事や雇用などの経済も地域には重要である。森林に代表される占冠村の豊富な地域資源を活用し、新たな資源も発掘しつつ、循環型のエネルギーや食料を中心とした経済を組み立てていくことが必要だ。そのためにも、仲良く知恵を出し合って、共有できる「コミュニティ」が何よりも大切である。「コミュニティ」は、経済、教育、福祉、観光などすべての分野にわたって威力を発揮するだろう。

また、鵜川を中心とした未来を考えると、流域の住民が行政の枠を超えて交流し、「流域のコミュニティ」を育てていく必要がある。そのために、今後も「鵜川135ビジョン」という目標を持って、

さまざまな講演会や鵜川135キロメートルを下るツアーなどを実施し、定期的にはかわ町の方々と交流しながら、地域ビジョンを作っていく準備を進めていく。

小さなこの村で始まった取組は、地域活動の潤滑油として役割を果たし、人々の生き方や暮らしの原点を教えてくれているようだ。



源流から海へ135kmを下るツアー（鵜川河口）

地域リーダー  
からのひとこと

コミュニティが、地域の課題を解決し、未来像をつくる

しむかつぶふるさとふつつくふくらむ協議会 山本 敬介

1人のリーダーに頼らない

占冠流の地域づくり

黙ってついていけばなんとかなる「地域リーダー」が必要というのは過去の話。占冠村にはさまざまな分野のプロフェッショナルが数多くいますので、そういう方々をつないで地域活動を形作り、未来像の構築につなげていくような「プロデューサー」の役割が大切だと思っています。

もちろんこれは行政にも求められる能力ですが、行政は担当者の能力にかかわらず、予算化してその議決がないと動けませんし、公平性が常に求められ、縦割りで融通がききません。これらは安定的な行政運営を行うには大切なプロセスでもあるので仕方がないことです。しかし、これでは行動するまでに時間がかかりすぎます。



楽しい場所には多彩な人材が集まる  
「鵜川の落差工を考える住民会議」

住民がさまざまな場面で顔を合わせて、多様な「課題」について話し合い、その都度行動していく。これは自治の原点とも言えるべき行動で、ここでいう課題は地域にとっては重要な「資源」です。課題がなければ自治やコミュニティは育ちません。この課題に、住民がしなやかに楽しみながら対応していくこそが地域づくりです。



地域の小学校で行われている川遊び授業



小水力エネルギーを楽しく学ぶ

## 地域活動は人間のためだけではない

私たちの活動は、人間だけの活動だとは思っていません。私たちは鵜川流域の大きな森と大きな水の循環の中で生かされている大自然の一部です。森の木々や、ヒグマ、エゾシカなどの動物や鳥、小さな虫や魚も同じ地域で暮らしている仲間です。こうした自然の循環をどうやって守って



山菜市のワークショップ ギョウジャニンニクを川で洗う

くのか。人間が守るというのも傲慢な考えですから、その自然に寄り添って人間が出来ることをすると行った方が良いかもしれません。根本はここにあります。

## 無理せず、楽しく、そこそゴキゲン

地域活動のための組織として、しむかっぷふふ協議会がありますが、この協議会



赤岩青巖峽は全国のクライマーを惹きつける

は国の地域づくりの助成を受けるために、地域活動のプレーヤーを再編集した組織で、活動はこの協議会の前からあり、現在もさまざまな組織や仕組みを使いながら続いています。2017年には流域の未来にとって次のステップに進むべく「鵜川135ビジョン」の準備をしています。地域活動は生き物ですから継続する資金も必要ですが、それ以上に活動する人々の「気持ち」が大切です。多くの地域活動はボランティアな気持ちと行動によって支えられていますので、楽しくなければ続きません。そして、小さな地域では人間関係がもつとも大切で、何かの目的達成のためにこれが壊れてしまうようでは、その後の損害は計り知れないのです。「無理せず、楽しく、そこそゴキゲン」が重要です。



山本 敬介さん

「無理せず楽しく」をモットーに、巧みなセンスで地域をプロデュース。



オホーツクの有機野菜と水産物をコラボした高齢者向用食品



## 地域の未来をともし「有機農業」

### 大空町の食と農を考える協議会（大空町）

オホーツク海と太平洋の分水嶺となる藻琴山。

藻琴山から北へ続く稜線は、火山灰に覆われた不毛な開拓地。

ここで、有機農業を核とした地域の連携が生まれている。

#### 大空町は山海の幸が 行きかうところ

藻琴山に端を発する藻琴川は、旧東藻琴村でなだらかな流れとなり、網走市にて藻琴湖をつくり、オホーツク海へ注ぐ。毎年5月になると小さな芝桜の花が山一面を彩る姿に、全国から観光客が集う。オホーツクに春を告げる光景となっている。

美幌町の古梅ダムに蓄えられた山の恵みは、美幌町と大空町を潤し、豊かな農産物を育みながら網走湖を形成。ワカサギやシジミなど豊かな川の幸をもたらしてくれる。川の流れとは逆に、秋になると海からの恵みがやってくる。鮭のことをアイヌ語で「シペ」という。アイヌ語で「本当の食べ物」を意味するようだ。

山海の恵みの中継地点である大空町。しかし川と川に挟まれた丘陵地の歴史は浅い。百名山の斜

里岳も間近に見え、遠くは阿寒連山を望む絶好のロケーション。そんな日進地域は、戦後の農地開拓事業により、痩せた火山灰地を切り開いた広大な農地が広がり、畑作三品（麦・甜菜・じゃがいも）を中心とする輪作体系が確立され、戸あたりの経営面積は30haを超える大規模畑作地域となっている。



ピンクの稜線がオホーツクの春を彩る芝桜公園（大空町ホームページより）

そこでは、日本を代表する「有機農業」が大規模に展開されている。これを契機にして、地域の間で、産業間で、そして人と人との連携が生まれている。

### 思いが生んだ「有機農業」

さかのぼること35年前、一般的な農業を営んでいた時代、子どものアトピーに悩まされていた。「原因は何だろう」と模索する中、無農薬で化成肥料を使用しない家庭菜園で採れた野菜を食事にすると症状が出ないことに気づいた。

このとき、自分が営む農業を振り返った。

この事実を、農業者としての経営方針に多大なる影響を与えた。「誰もが安心して口にできる農産物を世に届けること」を目標に、昭和59年、今からさかのぼること31年前に、日進開陽地域の農

業者7名により「有機栽培同友会」が立ち上がった。かぼちゃ3ha、ジャガイモ2haの有機農産物を女満別の直売場で販売した。

その3年後には同友会を「大地のMEGUMI」と称するようになる。その4年後の平成3年には同友会から利用組合に格があがり、平成20年には株式会社化に至った。このとき大地のMEGUMI所有の農用地5haに加え、参画者5名12haを数え、作付け品目もアスパラなどの野菜類7品目の農業生産、販売活動を展開することとなった。

同時に、「大空町の食と農を考える協議会」（以下「協議会」）を立ち上げ、平成20年度には、農山漁村地域力発掘支援モデル事業（現在の農山漁村振興交付金）の推進母体として、自らの有機農業の実践だけでなく、未来の担い手への「食育」や、有機食材を用

いた産業間の連携にとどまらず、他地域への有機農業の普及・推進や、流域間での連携などに積極的に取り組んでいる。



日の光をうけるメルヘンの丘公園のひまわり（大空町ホームページより）



藻琴山（標高1000m）を背景にした「有機農業」実践ほ場（協議会ホームページより）



一年間育てた成果。「次は輝農祭で販売だ！」



「値段の決め方」を学習中

## 未来の担い手を育む「食育」

「こんなに大きく育ったよ！」  
かぼちゃの重さに喜ぶ子どもたちの歓声が畑で響き渡る。播種からマルチングを経て、収穫、そのかぼちゃは学校給食で供され、輝農祭（後述）では販売までを子どもたちが行う。

それだけではない。畑では大学から土壌学の先生に有機農業を語ってもらい、教室では、物流の

話から料理人の話など、第一線で活躍する方々に登壇してもらおう。講師陣は皆、有機農業を契機にながりを持った方々であり、その方々が未来の担い手を育てていく。そして、こうした経験を糧にして、地域の貴重な人材へと成長していく。

協議会が展開する食育事業には、このような意図が込められている。

## 流域レベルの連携へ

日進地域における「有機」を核にした大地のMEGUMIの地道な取組は、一級河川網走川という広大な「流域」に影響を与えることとなる。

「有機」に関しては、大地のMEGUMIの後を追うように、網走川の最上流である津別町にて有機酪農の展開が始まった。牧草



も、濃厚飼料の原料となるデントコーンも、乳牛が口にするエサはすべて有機。そこから絞られる牛乳は、「明治オーガニック牛乳」として販売されている。これは、



「網走川流域の会」を伝える新聞記事（網走川流域の会ブログより）

北海道における有機JAS認定  
第1号となった。

大空町と津別町における「有機」  
の展開に、思わぬ方面からラブコ  
ールが寄せられた。それは「漁業  
者」であった。「網走川流域には、  
農地崩落の問題もあるが、有機農  
業がある」。

流域全体で産業も行政も学者  
も、みんな連携していこうとする  
動きが芽生え、網走市の二つの漁  
協と「有機のまち」JA津別町が  
中心となり、平成27年3月に設  
立された「網走川流域の会」へと  
繋がった。

人とのつながりがつくった

### 「輝農祭」

海や川には鮭がのぼり、里では  
収穫を喜ぶ十月中旬、人々は道の  
駅「メルヘンの丘女満別」に山海  
の幸をもとめて集う。



有機農産物を満載した輝農祭名物「軽トラ市」



自らが育てたかぼちゃを自ら販売。子どもたちの声が響く「輝農祭」

子どもたちは自分たちが収穫  
したかぼちゃを元気良く売る。  
「どう話したら売れるか」「自分  
たちの商品の魅力は何か」を自分  
自身に問いかげながら、一生懸命  
販売を行う。

有機農産物をプロの料理人が  
用いるとどうなるのか？レシピ  
を渡すだけでは物足りない。その  
場で提供し、人々の舌で有機農業  
を知ってもらおう。

そんな場が「輝農祭」だ。

まだ「利用組合大地のMEGUMI  
MI」時代に始まったこの祭りは、  
平成28年度で第15回を数え、来  
場者は5千人を数える大空町の  
一大イベントとなった。

輝農祭の開催に当たっては公  
的な支援は得ず、企画や運営は自  
らが行う。祭りの会場には遠く関  
西地方から運営のためにやって  
くる。「つながり」が生んだ成果  
は、祭りを通じて次の「つながり」



試作したかまぼこの数々。「大地のMEGUMI」と「朝倉商店」との連携により、新たな「かまぼこ」  
が生まれる

を生む。この祭りにはこうした  
「美しさ」が宿っている。

地域リーダー  
からのひとこと

古里の自然と共生する地域をめざして

大空町の食と農を考える協議会 赤石 昌志

つい最近までの農業は収量を如何に増  
加させるかを最優先に営まれてきたが、  
ようやくここ最近になって環境や健康に  
も配慮した生産活動が取りざたされるよ  
うになってきた。私も五八年の人生を振  
り返ってみて物のない時代から飽食の時  
代、そして現在に至るまで戦争こそ体験  
はしていないが急速に変化を遂げてきた  
我が国を見てきた。その中でも今ではあ  
まり耳にすることがなくなつたが「公害」  
という言葉がどんどん報道される機会が  
増えていったことを覚えている。

初めはこの北海道の田舎町に住んでい  
る人間にとってはあまり身近に感じるこ  
とのない出来事だったが、実は三十年ほ  
ど前から決して他人事ではなく同じよう  
なことが近間でも起こりつつあることに

気が付いた。そのころ生活を維持するこ  
とに精いっぱい廻りを見渡す余裕もな  
かったが、ある時子どもころ都会に転  
校していった友人が訪ねてきて昔話をし  
ていた時「あの空を埋め尽くしていたト  
ンボは今でもいるか 川では魚が今でも  
釣れるか」などと話しているうち、郷愁  
よりも罪悪感に襲われた。現状を伝える  
たび残念そうに顔を曇らせる彼になぜか  
責められている気がしてならなかった。  
実はそのことがきっかけで少しずつでは  
あるが昔の自然を取り戻しつつの営農は  
できないものかと考えるようになった。  
はじめはたった一人 たった一軒の取組  
であり、徐々に仲間も増え活動も多岐に  
わたり現在に至ったわけだが、今思えば  
結局は意を併にする人を如何に発見発掘



していくかということが、実はこういった協議会の推進に繋がっていく起因だと考える。どんなに想いがあってもそのとに共感共鳴してくれる仲間が増えていかなないと補助金や助成金をいくら使っても間違いなく長続きはしない。今思い返せばこの町の素晴らしい仲間たちに感謝してやまない。

今一度いろいろな事業に取り組んでいる皆さんにお聞きしたい。何のために頑張っているのかと？

私が今思うことは些細な笑顔 すがすがしい疲労感 その先につづけてきことへの達成感が共有できて初めて協議会の価値観が評価されると思っている。またそのことが継続の起源であると思う。

最後になるが大好きな柳田國男の言葉を紹介して終わりたい。

美しい村などはじめからあったわけではない。  
そこに住む人が美しく住もうとつとめて  
はじめて美しい村になるのである



赤石 昌志さん

むらづくりへの思いは誰にも負けない。ほとぼしるエネルギーが多く仲間の惹きつける。

大空町有機農業推進協議会

### 作業状況 (2014年度赤 A-1)

データ選択 | 作業詳細

年度	生産工程管理者	生産者	格付責任者	ほ場番号	作物名	栽培面積	ヘクタール
2014	赤石昌志	(株)大空のMEGUMI	藤村昌志	赤 A-1	馬鈴薯	51.00	

選択したほ場の基本データ

全17件のうち、1~10件表示

日付	作業内容	使用種苗・資材			使用機械・器具		特記記事
		種名及び資材名	数量	入手先	機種・器具名	洗浄・整備方法	
05/16	堆肥散布	牛糞堆肥	3t/10a		片岡農機	マニュアルスプレッダ	高圧洗浄
05/24	粗耕起					ソイルスクランブラー	高圧洗浄
05/26	整地					ロータリー	高圧洗浄
05/29	元肥	サンリッチ	100kg/10a				
05/29	ほ種	きたあかり	220kg/10a			ポテトプランタ	高圧洗浄
06/09,16	めくら除草					除草カルチ	高圧洗浄
06/25	中培土					カルチ	高圧洗浄
06/29	培土					ロータリカルチ	高圧洗浄
07/03	秋地除草					ロータリー	高圧洗浄
07/16,24	防除	ボテカ-D F	500a		丹渡屋	スプレーヤー	高圧洗浄

栽培履歴が表示されます

作業風景・生育状況写真

本システムに記録のデータは入力に際し万全の注意を払っておりますが、データ不備や誤謬等が起こり得る旨、ご了承ください。  
※本サイトの【免責事項】についてご確認ください。  
http://oozora-yuuki.com  
©大空町有機農業推進協議会

有機栽培履歴の表示 (大空町有機農業推進協議会ホームページより)